

宇都宮・富屋西部愛護会

児童とホタル育て10年

飛ぶ姿増え環境教育にも



放流会で水路にホタルの幼虫を放す児童たち

【宇都宮】ホタルの里づくりを進める富屋西部ホタル愛護会（入江利長会長）が、地元の富屋小の児童と一緒にホタルを育て、放流する活動が今年で10年を迎えた。幼虫の飼育から放流、成虫が飛ぶ様子の観察会まで年間を通して活動。児童がホタルの生態だけでなく、生息できる農村環境づくりの大切さも学ぶ機会となっている。

（五月女裕美）

同愛護会は、ほ場整備により悪化した水性昆虫や魚などの生息環境改善のため、地域住民らが2007年に結成した。ホタル保全

地の環境づくりや人工飼育などに取り組んでいる。放流は2008年度から開始し、富屋小の3年生も参加。春に愛護会のメンバーから生態や望ましい自然環境などを学び、夏にホタル観察会や生息地の環境調査を実施。10月から2月の放流まで幼虫を飼育し、えさやりや水槽の清掃などを行っている。

育てたホタルは保全地の人工水路に毎年放流。活動当初は約800匹を放流しても成虫となったのは数匹程度だったが、草刈りや水路の水量管理などに励み徐々に増加。継続した活動で餌となるカワニナも自然発生し、昨年は40〜50匹が飛来するまでになった。愛護会事務局は「児童がホタルを観察するだけでなく、自分で幼虫を育て放流することで、地域の生き物への関心を高め、生息環境を大切にすることを育んでいる」と意義を語る。

19日の放流会には愛護会と2、3年生の約100人が参加。「大きくなってね」と声を掛けながら、ゲンジとヘイケボタル計150匹を放した。3年平野楓太君（9）は「毎日観察して大切に育てて来た。元気に成虫になってほしい」と願いを込めていた。20日には3年生が2年生を前にホタル学習発表会を行った。現在の2年生が4月以降は活動の中心となり、飼育のバトンをつないでいく。